

〈研究ノート〉

パウル・クレーの絵画

石 野 眞

Makoto ISHINO : A Study of Paul Klee's Paintings

スイス生まれのパウル・クレーは、1930年にドイツで絵画作品「周辺ニ描ク(アド・マルギネム)」を制作した。この作品は、現在スイスのバーゼル美術館に収蔵されている。本稿はこの作品解説と長く続けているパウル・クレー研究ノートの断簡である。

キーワード：Paul Klee パウル・クレーの絵画 バーゼル美術館 スイス・ベルン市 吉田秀和

I はじめに

さきに、武満徹が若き日にパウル・クレーと音楽について、クレーの絵画「アド・マルギネム」を取り上げたことについて考察、研究した。本稿は、このパウル・クレーの絵画作品「周辺ニ描ク(アド・マルギネム)」の作品解説とパウル・クレー研究を続けている研究ノートの断簡である。

かねてより手を尽くして探していた作曲家、武満徹が若き日にパウル・クレーについて、美術雑誌『アトリエ』に記した月刊誌「アトリエ」1951年／昭和26年6月号・アトリエ社復活記念号を入手することが出来た。ここにおいても、滝口修造、花田清輝、仲田定之助などのパウル・クレー研究の先輩を見ることが出来た。特に仲田定之助の日本におけるパウル・クレーのオリジナル作品の最初の公開展示についての指摘は貴重である。

ここに、パウル・クレー作品「周辺ニ描ク」の作品解説として拙文を提示する。また長く続けているパウル・クレー研究について、研究ノート断簡を記す。

II 「周辺ニ描ク」

この作品は1930年、パウル・クレー51才の制作である。パウル・クレーによる題名は「AD MARGINEM」で現在、スイスのバーゼル美術館所蔵である。この年、3月13日から4月2日までニューヨーク近代美術館でクレーの個展が開催されている。6月には、ドイツのデュッセルドルフ美術アカデミーから教授として招聘され、7月から8月までイタリアのローマ近郊のヴィアバレッジョに滞在している。

題名の「AD MARGINEM」は「欄外に」の意のラテン語である。アド・マルギネムを「周辺ニ描ク」とするのが適訳。

パウル・クレーは、自然との対話のなかに多くの表現を生み出し繊細な線描と豊かな色彩によって多くの表現を試み、私たちをすっかりとりこにしてしまった。

鳥がいる。美しい、かわいい鳥。

植物。草花の数々。

あかいまる

なによりも、おおきく、ひろく

広がる画面空間が美しい。
 自然の囁き、耳を澄ましてごらん
 絵のなかにきく
 絵になかにみる
 u・V・r・u・l・
 線の織り成すリズム
 動き・蠢き・
 繊細で情緒豊かな色調が生まれる。

クレーの作品は、音楽が人を魅了するのにも似た、不思議な力で私たちに語りかけてくるように思われる。

クレーの作品は、音に色彩があるように、色の中にも音が潜んでいる。

「教育スケッチブック」で語られるパウル・クレーの言葉と文法は、美術の言葉、造形の言葉—造形言語による造形思考。

Ⅲ パウル・クレー研究 断簡

1. パウル・クレーの国籍復権

パウル・クレーは、1879年12月18日にスイスの首都ベルン郊外、ミュンヘンブーフゼーに生まれた。父は音楽教師、母は声楽家。ドイツ・ミュンヘンの美術学校に学び、ベルンに帰ってベルン市管弦楽団のヴァイオリンメンバーとなる。初期の銅版画を制作して画家としての道を歩む。画家であり、バウハウスにおける美術教育者パウル・クレーの日々は、ピアニスト、リリーを妻としていつも音楽に満ち溢れていた。パウル・クレーの表現世界には繊細で響きの豊かな線描と調和する色彩のひろがり、音楽性豊かな響きと調和が感じられる。ドイツ・ワイマールからバウハウスの教授としての招聘を受け教鞭を取り、もっとも充実した絵画制作を続けながら、ナチス・ドイツの迫害にあって生誕の地に帰るもスイス国籍を取得できないまま1940年6月29日世を去った。

【1939年8月、ついにヨーロッパを破局に陥れた

第二次大戦が勃発する。それまで、ナチ崩壊の日を待っていたクレーも、ついにあきらめて、この年の4月にドイツの国籍をすて、スイスの市民権を獲得するための申請を考えるようになり、その関係者と相談し始めた。ところがスイス連邦は、なかなか、それを受け入れたがらない。当時の記録が残っているが、スイス政府は、クレーにはたして自活する能力があるかどうかを疑い、結局は厄介者を背負い込んでしまう結果になりはしまいかと心配したのである。

もちろん、このころのヨーロッパの状態を考えれば、ヨーロッパの多くの国から中立国スイスに逃げ込もうとした人々は数限りなくあったのだろう。要するに、亡命者、避難民である。その全部を狭い領土、少ない人口のスイスが引き受けかねたのは、容易に想像がつく。だが、トーマス・マンのような人がすぐスイスに受け入れられても、クレーがむつかしかった理由は、単に金があって、スイス政府の負担にならずにすむかどうかというだけでもなかった。

というのは、さきに、「当時の記録」といったものの中には、政府が、美術の専門家に対し「クレーという画家は、おかしな絵ばかり描いているが、あれは本当に精神病者の症状を表すめっちゃくちゃか、あるいは、文字通り精神の発達が幼児くらいの段階にしか到達していない人間、つまり知的障害者のようなものではないのか」ということの鑑定を依頼する文書があるくらいで、要するに、スイス当局にはクレーがまともな人間かどうかについての懸念があったのである。それに、この諮問を受けた専門家（その名ははっきりわかっている）の中には、その疑いを明確に否定しない人もいたのだった。

いや、専門家だけではない。クレーは展覧会に出品するごとに、普通の市民からも、狂気だ、退行性痴呆症だといった倍音さえ伴った、ありとあらゆる悪罵や嘲笑、反感、憎悪、嫌悪の声を浴びせかけられていたのだった。

そんな有様なので、少数の熱烈な支持、あるいは

賢明な評価、敏感な理解があり、美術商の中にも、何とか彼の作品をひろく理解させようと努力した人もなくはなかったにもかかわらず、展覧会を開いても、彼の絵の売れ行きは、かならずしも、はかばかしくない。

そうなると、スイスの当局としては、そうでなくとも、強大で残忍な隣人、ナチ・ドイツから「退廃芸術家」というレッキとした札をはりつけられているクレーという人物に対し、スイスの市民権を与えたりするのは、ナチとの関係を悪くこそすれ、良くするはずはないという思惑がからむ。

要するに、スイス政府（当時の）は、クレーの芸術を認める能力がない上に、彼を引き受ける勇気もなかった。

というわけで、クレーの帰化問題は、中ぶらりんのまま。1940年1月、正式の申請書が提出されたが、その許可が出る前、その年の6月に、ロカルノの病院で死んでしまった。

しかし、今は、世界中で、スイス大使館の肝入りによるクレーの展覧会が開かれる。これが歴史というものの一面である』—吉田秀和。

2. クレーについて語る簡潔な言葉

『クレーはその美術上の手段においても、その造形内容においても、はるかに群をぬいて、われわれの世紀の最も独創力の豊かな画家です』

『クレーはまたわれわれの世紀の、最も色彩に敏感な、最もメロディーの豊かな、最も音楽的な画家でもあります』—スイス・バーゼル美術館長・ゲオルグ・シュミット博士／1955・中村二柄訳・『クレエは静かに、微笑しながら明日を予言する作家です。』武満徹・1951

3. アレクサンダー・クレー

平成八年秋、パウル・クレーの孫、アレクサンダー・クレー氏が浜田市世界子ども美術館の開館記念式典と開館記念展「子どもたちのパウル・クレー展」に際して来日、クレー家の貴重なコレクション、

特に少年時代のスケッチブック、水彩画を初公開するとともに臨席された。祝典の挨拶には「パウル・クレーの絵画表現は、子どもの作品にも興味を示しながら、クレー自身の作品に少年時代のプリミティヴ性がみられる」と祖父クレーの作品とこどもの美術の関わりを解きあかしながら、日本の美術教育史に残る素晴らしい講演となった。

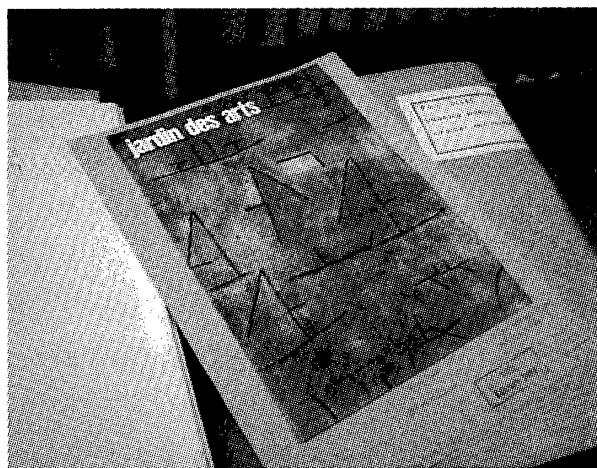
1977年、私は文部省在外研究員として一年間スイスで研究生生活を持ち、ベルン美術館客員研究員として資料室での研究生生活とクレーの特別展、クレーノートの研究に従事した。このことからアレクサンダー・クレー氏との話題がクレー作品とベルンの地に広がり再会を約束した。この出会いから2002年、私は、スイスのベルン美術館にてアレクサンダー氏と再会して、ベルンの地にパウル・クレー美術館開設構想の進んでいることを知り、またベルン美術館とパウル・クレー財団では、デジタルアーカイブスの時代にあって、全作品一万余点の作品目録と作品のデジタル収録を精力的に進めていることを知った。

レンゾ・ピアノ氏の設計で美術館の設計が進んでいることを熱心に語るアレクサンダー氏とともに、素晴らしい美術館2005年に完成することを楽しみしている。スイスの首都ベルンの地では、2005年の6月オープンを目指してベルン郊外に「パウル・クレー美術館」が建築中である。設計は、ポンピドー・センター、ローマのチェチーリア音楽ホール、日本の関西国際空港等の設計を手がけたレンゾ・ピアノ氏である。

4. クレー研究・ロンドン

2003年の1月にロンドン大学のコートールド研究所で、クレー研究の資料を調査した。今回が2回目、時間もあって、ゆっくり滞在しても良いとの許可をいただいたので、貴重なクレー研究のほぼ全資料に目を通すことができた。

この作品「港の帆船」は現在、パリのポンピドー・センター国立近代美術館の常設コレクションであ



コートールド研究所クレール研究資料

る。2002年秋のバリ、新装成ったポンピドー・センターではこの作品をはじめ、クレール作品の数々を鑑賞した。

5 美術の師

昭和37年の秋、母校の島根大学教育学部美術研究室助手として帰松した際、真っ先に3人の美術の先生にご挨拶に出かけた。

米子東高校で二年間美術を指導頂いた洋画家、田淵巖先生。お宅に出かけて初めて知ったのが、先生は明道小学校の同級生、東京大学医学部から虎ノ門病院の外科部長を勤めた熊野潔君の叔父様でもあるとのこと、田淵巖先生は米子東高校章「柏葉」と女子学生制服をデザインされ、美術部で多くの俊英を指導された。美術部の先輩に工業デザインで新幹線車両等を手がけた東海大学名誉教授の手銭正道氏がいる。奥様は、長くタブチ女専を主宰された田淵竹野先生で、竹野先生からも懇切な指導を賜った。

島根大学の前任者は、山口大学教育学部講師に転出された細田育宏先生である。先生のバウハウス教育に基づく構成の授業に傾倒していた私は、その魅力に取り付かれて以来四十年、今もこの研究に取り組んでいる。

鷺見彦一先生は、米子市立第二中学校で三年間美術を指導頂き、受験に際して特別にデッサンをご指導頂いた。鷺見彦一先生は、後の米子市美術館長で

ある。

幼き日々に、近所で暖かい眼差しで励ましていただき、米子美術家協会に油絵の出品を勧めて頂いた妹尾輝雄先生。妹尾輝雄先生には研究生生活のスタートを記念して「ポール・クレール造形芸術論／作品と生涯」勝見勝編／三笠書房版を頂いた。これはバウハウス叢書「美術教育者のスケッチブック」の全訳で平成三年刊行の利光功先生の中央公論美術出版に先立つこと三十余年前、今では大切な私の蔵書である。「これは良いよ、読んでごらん」という言葉はいまだに忘れられず、この本によってクレールの魅力に取りつかれて以来四十年、今もクレール研究に取り組んでいる。このクレールのワイマール国立バウハウスにおける理論教育の一部をなすものの原案」の全訳はクレールの作品の表現と制作の秘密を解く鍵である。

IV 終わりに

画家は、美術でしか語れない言葉を画面に表現しているが、その言葉を理解することは、ただその美に感動するだけでは満ち足りない、奥深い秘密を秘めている。感性に触れ、響く、美しいもの、美を愛し、美術作品に感動する豊かな心の教育は人間教育の根幹であるが、制作する人と鑑賞する人が、お互いに繊細で豊かな感情を交互に受け止め、持ち続けるようでありたい。

昨年の秋、ニューヨークで美術とデザインの研修に従事する機会を得、ニューヨークのメトロポリタン美術館のパウル・クレールを鑑賞した。ここにも新たなパウル・クレール研究の課題を見つけたように思う。

参考文献・資料

- * 「アド・マルギネム」『クレール』大岡信・新潮美術文庫50・1976年・作品19
- * 「周辺ニ描ク (アド・マルギネム)」『パウル・クレールの芸術』—その画法と技法と—西田秀穂著・

- 東北大学出版会・2001年・72頁
- * 「周辺ニ描ク(アド・マルギネム)」「クレー」アート・ライブラリー・ダグラス・ホール著・前田富士男訳・西村書店・2002年・86頁
- ☆
- * 「ポール・クレー 芸術論 作品と生涯」勝見勝訳編著・三笠書房・1957年
 - * 「パウル・クレーの芸術・PAUL KULEE PET-ROSPLECTIVE」編集：愛知県美術館・寺脇臨太郎／拝戸雅彦・山口県立美術館・斉藤郁夫．制作：印象社．発行：愛知県美術館・中日新聞社．1993年
 - * 「時の流れのなかで」新カイエ・ド・クリティク・吉田秀和・読売新聞社・1994
 - * 「クレーの贈り物」コロナブックス編・2001年・平凡社
 - * 「クレーの詩」高橋文子訳・2004年・平凡社
 - * 月刊誌「アトリエ」1951年／昭和26年6月号・アトリエ社復活記念号
 - * ライカM3と「おいしくない生活」鈴木恒夫・45～47頁・クラシックカメラ専科・No71・ライカブッカーライカM3誕生50年……朝日ソノラマ2004年3月25日
 - * 「日本歌曲」の5代表作の歌詞の英訳及び文化的背景の解釈—狩野キャロライン・エリザベス・鳥取短期大学紀要第42号・2004年3月
 - * 随想「山陰つれづれ」酒井董美著・新風書房・2003年8月1日
 - * 「教育スケッチブック」パウル・クレー著・利光功訳・パウハウス叢書2・中央公論美術出版1991年
 - * 造形思考(上)パウル・クレー／土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎共訳／新潮社1973
 - * 「クレエ」ハーバート・リード著・片山敏彦訳・著・みすず書房・昭和29年・2月15日
 - * クレー・現代美術7・全10巻・第1回配本・片山敏彦解説・みすず書房・昭和34年12月
 - * クレー・現代世界美術全集・ヴァンタン・第13巻・中原佑介解説・集英社・1971年
 - * 「パウル・クレー」フェリックス・クレー著・矢内原伊作・土肥美夫訳・みすず書房・昭和37年・5月10日
 - * 「抽象絵画の誕生」土肥美夫著・白水社・1984年7月15日
 - * 「近代絵画の見かた」ゲオルグ・シュミット著・中村二柄訳・現代教養文庫337・社会思想社・1961
 - * 「美術史小論集」一研究者の足跡，中村二柄著・一穂社・1999年10月20日
 - * 日本パウル・クレー協会
URL：<http://www.paul-quee-japan.com>
 - * PaulKlee-Zentrum.
URL：<http://www.paulkleezentrum.ch>
- 石野眞 パウル・クレー研究—論文等
- * 「Paul Kleeの“Padagogisches Skizzenbuch”について」—昭和47年12月・島根大学教育学部紀要・第6巻(人文・社会科学編)
 - * 「パウル・クレーの造形思考」—平成6年3月・島根大学教育学部紀要・第12巻(人文・社会科学編)
 - * 「パウル・クレーの造形思考」—昭和52年12月・島根大学教育学部紀要・第12巻(人文・社会科学編)
 - * 平成9年の島根大学教育学部紀要「パウル・クレーのプリミティブ」
 - * 「武満徹のパウル・クレー絵画と音楽」—平成13年3月・島根大学教育学部紀要・第34巻(人文／社会科学編)
 - * 「パウル・クレーの絵画『アド・アドマルギネム』と武満徹」2003年12月・鳥取短期大学研究紀要・第48号
- ☆
- * 没後50年記念パウル・クレー展—1890年から1920年代へ．千足伸行監修・産経新聞社事業局編集・印象社制作・産経新聞社．1989年

* 「パウル・クレーの芸術・PAUL KULEE PET-ROSPECTIVE」編集：愛知県美術館・寺脇臨太郎／拝戸雅彦・山口県立美術館・斉藤郁夫。制作：印象社。発行：愛知県美術館・中日新聞社。1993年

☆

* 「パウル・クレーの芸術」山口展—繊細で音楽的

な響き・平成5年2月・毎日新聞

* 「こどもたちのためのパウル・クレー展に寄せて」山陰中央新報／平成9年1月8日。

* 「パウル・クレー美術館に期待」石野眞・中国新聞社・夕刊コラム「でるた」／平成12年6月15日。

* 「私のパウル・クレー研究」潮流・日本海新聞・平成15年5月16日